

「高倉昔ばなし」より
よごさ

四番 与五三が聞くからそつそと踊れよ

平成十二年一月三十日
高倉郷土芸能保存会

《解説》天保四年、江戸中村座のあの大きな、九変化の芝居絵を観音堂にもたらしたあの、滝坂の喜太郎親分も、このところどうにも景気が悪く、今夜も牛沢の賭場へ出かけたが、全然目が出なかった。

夜も更け、とぼとぼと、梵天山の下の赤坂の登りっ口の辺りまで帰って来ると、右手のすり鉢の辺りにぼんやりとなにやらあかりが点っている。

「うーん、ありや大方狐の嫁入りでもあるべえか、ちよつくら見ていくべえ」

親分はステージ脇まで進み物陰から望む

猫は1くから一人ずつ入口へ入った所で「おらあ〇〇の猫だ」と名乗り**笛**にんばで踊り乍らステージへ座る。一人一人笛は切る。

全員揃ったところで

① 「さあ、みんな集ったか、これでこれから高倉中の猫の総踊りだ。ヤイ喜太郎猫、今夜はお前が吹え吹けや」

② 「おっと一寸待ってくれえ、実アおらがじゃあよう、ここんとこ景気が悪くてよう、ろくな物あ喰つちやあいねえ、今夜もあずきがゆでべろをやけどしちまっつてよう、痛くつて痛くつて、おらあ笛どころじゃあねえだア、すまねえがそうめんや頼まあ」

③ 「とんでもねえ、おらあ魚っ喰いでようのでえ胃がつつたつて息が続かねえでだめだあ、すまねえが上道い頼まあうじみち」

④ 「おらがじゃあよ、餅べえいらつくからよ、忙しくつて猫の手え貸したらよう、豆だらけにされちゃつてよう、笛の穴がふさがらねえだ、すまねえ天王山頼まあ」

① 「ところがおれもよう、今こけえ来ん時、一本橋から実あ入歯あおつことつしやつてなあ、息がむつてだめだあ、しょうがねえ笛なしで踊ちまあべえや」

太鼓のみ

ドドンがドン それ ドドンがドン それ

皆 ① それ、与五三が聞くからそつそと踊れよ、与五三が聞くからそつそと踊れよ
 ② それ、与五さん桶屋は下手桶屋、与五さん桶屋は下手桶屋
 ③ それ、水の吸めない下手桶屋、水の吸めない下手桶屋
 ④ それ、これじゃなるほど木目箆きめけえだ、これじゃなるほど木目箆だ
 それ、木目箆桶屋だ下手桶屋、木目箆桶屋だ下手桶屋
 皆 それ、与五三が聞くからそつと踊れよ、与五三が聞くからそつと踊れよ

【笛】 囃子カンカンノーで引込み 親分は立ち上り腕を組み

喜 「おれも猫にまでふところをバラされるたあなあ、帰ったらこつぴどく怒ってやらにやあなるめえよ」

【笛】 ヤタイで引込み

《解説》あくる朝喜太郎猫は追い出され、長えわらじでもはいたか二度と戻らなかった。これは子分を猫に例えた話だとも云われている。尚、与五さん桶屋は高倉寺近くに居たと伝えられて居ります。

配役	氏名	囃子方	氏名
解説	しちの屋 洋一郎	笛一人	ほとけ屋 甲平
猫 1	たきざか屋 好男	大判一人	宮の久保 吉司
猫 2	しま仲屋 昇	付一人	新上道 保生
猫 3	そうめん屋 照正		
猫 4	天王山 透		
猫 5	うえみち屋 章		
猫 6	そうめん屋 正行		
猫 7	高一屋 要作		
喜太郎	しんでん屋 嘉幸		